

J男さんは、「良くできたね。」と声をかけると、必ず小走りに遠く走って行ってしまふ。K男さんは、職員の方に近づいて来たかなって思って、「どうしたの？何かお話がありますか？」と尋ねると、<別に話なんかありませんよ>というような表情をして通り過ぎ、そのあと必ず排尿の失敗をした。M男さんは、保育士養成校の実習生が来ると、必ず両頬を抓ることからお付き合いが始まった。K子さんは、必ず年度末になると「〇〇さん（職員の名前）は、お嫁に行きますね！」と声が枯れるほど大声を張り上げた。〇〇さんという職員は、彼女の一番大好きな職員のはずなのに…。T子さんは、秋が深まりいよいよ朝晩の冷え込みが強くなってきた頃、毎年のように「電気毛布を私にはかけないんだなあ！〇〇さんにかけてあげるんだなあ！」と支援者の後をついて回り、何回も叫んだ。出そうと思えば、自分で出せる押し入れにちゃんと電気毛布は入っているのに…。

実は、これらの行動全てが、本当の気持ちとは裏腹のあまのじゃく的な行動なんです。J男さんは、本当は褒められてうれしいのに、そこに居続けることができないで、逃げるようにして遠くへ行ってしまう。K男さんは、職員が声をかけるまでは、オシッコが出たいことを伝えるために近づいて来ているのでしょう。しかし、職員が声をかけた途端、何事もないかのようなポーカークフェイスになってしまいます。M男さんは、本当は仲良くしたいのに、嫌われるに決まっているほっぺたを抓ることから関係が始まってしまいます。結局、仲良くできるところか、身長180cm、体重80kgの彼は、恐れられる存在になってしまいます。K子さんは、一番辞めて欲しくない職員の名前を、さも辞めて欲しいかのような言い回しをして、一日中訴え続けてしまいます。T子さんは、やっぱり電気毛布を使い始めたいと、心の中では言っているんでしょね。

しかし、このあまのじゃく的な行動、な

かなか手強いです。一筋縄では、矯正できません。お説教や説明、解説や説得では、このような行動の変容は、絶対に困難です。

それは、心の奥底に、2つの大きな相反する気持ちの葛藤があり、それが拮抗することによって生じている行動だからです。

<褒めて欲しい気持ち>とく褒められる価値なんか自分にはないという気持ち>【J男さん】、<オシッコを伝えたい気持ち>とく伝えてようとしても分かってくれなかったらどうしようという不安な気持ち>【K男さん】、<仲良くしたい気持ち>とくどうせ僕なんか嫌われるに決まっているという気持ち>【M男さん】、<辞めて欲しくない気持ち>とく私なんか好かれているはずがないという気持ち>【K子さん】、<甘えたい気持ち>とく甘えてはいけない、自立しなければいけない気持ち>【T子さん】、この二つの気持ちが心の中でせめぎあい（おそらく51対49か49対51）、行動の表現形としては、どちらか一方しか選択できませんから、結局、本心を隠す形で行動が生起しているのです。

この2つの気持ち、簡単に大別すると、職員との対人関係的な距離をく近づきたい気持ち>とく遠ざかりたい気持ち>ということになります。

かの精神分析家のフロイトは、この葛藤状態のことを、『ヤマアラシのジレンマ』と呼びました。寒さで震える2匹のヤマアラシが、体を温めようと近づけば、体に生えた針がお互いの体に刺さって血が流れ、その痛さに耐えるのが嫌で、離れてしまえば、寒くて死んでしまう、そんな究極の心理的葛藤状態のことです。

しかし、人間は、痛みを覚悟して、対人関係の距離を近づけなくては、決して幸福にはなれません。それは、どんなに重い自閉症の方であっても変わらない真実なのです。

では、次回、連載31は、あまのじゃく的な行動を脱する処方箋についてです。